

白い雲

小川未明

青空文庫

一

みんなは、なにかすてきに、おもしろいことがないかと、思おもっているのです。敏としちゃんも、もとより、その一人ひとりでありました。往おうらい来らいで、義よつちゃんや、武たけちゃんや、かつ子こさんたちが、集あつまって、なにか見みて笑わらっています。

「なんだろう？」と、敏としちゃんは、走はしってゆきました。

義よつちゃんや、真まつ黒くろな砂鉄さてつを紙かみの上うえにのせて、両手りょうてで持もっていると、武たけちゃんや、磁じ石しやくで、紙かみの裏うらを摩こすっています。すると、砂鉄さてつがむくむくと虫むしのほうのように、磁石じしやくのほうほうについて動うごくのでした。

「おもしろいのね。」

「不思議ふしぎだろう。」と、武たけちゃんが、自分じぶんもそれに見みとれて頭あたまを傾かたむけていました。

「僕ぼく、たくさん砂鉄さてつを取とったのだけれど、洗あらったら、これんばかりになつたのだよ。」
義よつちゃんや、砂鉄さてつの入はいっているびんをポケットから出だして、見みせていました。

これを見みると敏としちゃんは、にやりと笑わらいました。自分じぶんも大おおきな磁石じしやくを家いえに持もっている

とおも
と思つたからです。それは、いつかお隣の兄さんから、もらったものです。もう赤く塗つ
たところがだいぶはげていたけれど、もとは、いい磁石だつたのです。

あ
明くる日、敏ちゃんは、学校へいくと、休みの時間に、運動場の砂場で、小山と
いっしょに砂鉄を取るのに夢中になっていました。小山の磁石は、敏ちゃんのより、
かたちがい
形は小さいけれど、赤いところも全部ついていて、吸いつける力は強かつたのでした。敏
ちゃんの磁石は、大きいけれど力が弱かつたのです。

きみ
「君、どれだけ？」と、敏ちゃんは、砂鉄を取るのに、負けるような気がして、きくと、
こやま
小山は、

「まだ、こればかりさ。」といって、しわくちやになった、どろだらけの紙を開いて見せ
ました。

とおお
「たくさん取れたね。僕の磁石は、だめだ。」と、敏ちゃんは、自分の磁石が、ただ
大きいばかりだというのが、なんとなく歯がゆくなりました。

「それに、電気をかけると強くなるのだぜ。」と、小山が教えました。

でんき
「電気？」

とし
敏ちゃんは、そのことを、はじめて知つたのです。さつきから、この不思議な力は、い

つたいどこからくるものかということを考えていたのです。大きくなれば、わかるだろう。けれど、あの太陽をだれが造ったのかわからないうちは、あるいは、この力もどこから生まれるかということはわからないのかもしれない、思いながら、茫然として、青空を仰いだのでした。

「君っ、ベルが鳴ってしまったんだ！」

こう叫ぶと、小山は、あわててはね上がりました。敏ちゃんも、驚いて、運動場に入らないのに気づくと、急いで小山の後を追って、教室へ駆けつけたのです。

先生は、後れてきた二人を、じつとごろんになりましたが、黙っていらつしやいました。敏ちゃんは、お座についたけれど、しばらく心臓がどきどきとしていました。

二

「磁石に、電気をかけると、強くなるってほんとう？」

敏ちゃんは、小山のいったことを義ちゃんにききました。義ちゃんは、敏ちゃんよりは、一年上の組です。

「ほんとうさ、電車でんしゃの通とおつたすぐ後あとへ、レールに磁石じしやくをつけると、電気でんきがかかって、強つよくなるのだよ。僕ぼくたち、これからいくのだが、君きみもいかない？」と、義ちゃんよっちゃんは、いいました。

「レールに、磁石じしやくをつけるの？」

日ひごろ、お母さんかあに、電車道でんしゃみちへいつて、遊あそんではいけないと、堅かたくいいきかされているので、それが頭あたまに浮うかぶと、敏ちゃんとしは、どうしようかと返事へんじに迷まよいました。

「すぐ、レールにつけなければ、だめなんだよ。僕ぼくたち、冒険ぼうけんをして、電気でんきをかけにくのさ。」

「武ちゃんたけちゃんと？」

「ああ、あまり小ちいさいものは、危あぶないけど、君きみもいつしよにおいでよ。」と、義ちゃんよっちゃんは、すすめました。

もし、お母さんかあに知しれたら、しかられると思おもつたが、義ちゃんよっちゃんが、

「かつ子こさんだつて、くるのだから。」といったので、弱虫よわむしと思おもわれては、いけないと思おもつて、

「僕ぼくもいく。」と、敏ちゃんとしは、約束やくそくしました。そして、ポケットから、大おおきな磁石じしやく

を出して、ながめていますと、

「お見せ、大きいのだね。これに電気をかけたら、ものすごくなるよ。鉄びんでも、なんでも持ち上げるだろう。だけど、赤いところがはげているから、じきに力が弱くなってしまうね。でも、大きくて、すてきななあ。」

義ちゃんは、敏ちゃんの磁石を見て、うらやましがりました。そして、手に取って、つくづくとながめていました。

午後から、おおぜいで電車道へ出かけたのです。彼らは地を震動して、電車が通過するたびに、飛び出していつては、レールにめいめいの磁石を押し当てていました。その間、女の子供たちは、左や右を見張っていました。

遠くからトラックや、オートバイの影が見えると、

「あっちから、きた！」と、注意をしました。

みんなが、いつも遊ぶ原っぱへもどってきてから、磁石の試験を試みただけで、その力には、前とすこしの変わりもなかったのです。義ちゃんや、武ちゃんの磁石は、やはり敏ちゃんの大きな磁石よりは、ずっと力が強かったのです。

晩方、敏ちゃんは、ラジオ屋のおじさんのところへきました。そして、電車のレー

ルから、電氣を取った話をしました。

色の黒い、口ひげの生えたおじさんは、目をまるくして、敏ちゃんの話をきいていました、

「あぶないな、過ってひかれでもしたら、どうするつもりだ。なんで、そんなことで電氣が取れるものか。どれ、おじさんが、磁石に電氣をかけてやるから、もう、あぶないまねをしてはいけないぜ。」と、諭しました。

おじさんは、ラジオの針金をぎりぎりと敏ちゃんの磁石に巻きました。つぎに、その二本の線の端を電池の端子に結びつけました。すると、電流が通じて、青い、美しい火花が散りはじめました。

「ああ、これぐらいでいいだろう。これなら、たくさん砂鉄が食いつくぜ。」と、人のよいおじさんは、笑って、磁石を敏ちゃんに渡してくれました。

三

地理の時間でした。小山は、夜店で買ったといつて、丹下左膳と侍の小さな人形を

二つ三つ、紙かみに載のせて、下したから磁石じしやくを操あやつつて踊おどらせていました。磁石じしやくの動かし具合ぐあいで、人形にんぎようどうしは、たちまちチャンバラをはじめののです。小山こやまは、先生せんせいのお話はなしなど、耳みみに入いれようもしないのです。

「やあ、やあ。」と、先生せんせいには聞きこえないように、掛け声かかけこえをかけて、丹下左膳たんげさぜんと侍さむらいに立ちまわりをさせていました。場所ばしょの近いものは、笑いわらを殺ころして見ていました。敏ちゃんとしは、先生せんせいにわかんと思おもつたから、気がきでなかつたので、

「見つかるよ。」と、小山こやまに、注意ちゆういをしました。

しかし、もうこのときは、遅おそかつたのです。先生せんせいは、小山こやまをにらんでいらつしやいました。ふいに、先生せんせいがお黙だまりになつたので、小山こやまが、顔かおを上げあてみると、ほとんど、いっしょに、

「小山こやま、さつきからおまえはなにをしている？ わかつているかね、塩原温泉しおばらおんせんはどこにあるか、いつてごらん。」と、先生せんせいは、小山こやまをお指さしになりました。

小山こやまは、片手かたてに、磁石じしやくと紙かみを握にぎつて、机つくえの下へ隠かくすようにして、立ち上たあがりました。

「栃木県とちぎけんにあります。」

「じゃ、群馬県ぐんまけんにある、有名な温泉場おんせんばは？」と、先生せんせいは、お問といになりました。

今度は、よく聞いていなかったの、小山は、ちよつと返事ができませんでした。このとき、二、三人席をへだてて、平常からおもしろいことをいって、人を笑わせる武田が、小さい声で、

「どつこいしよ。」といいました。

これをきいたものが、笑い出すと、先生は、怖ろしい目を武田の方へ向けて、おにらみになりました。とうとう我慢がしきれなくなつたというふうで、

「小山と武田は、ここへ出ろ！」と、先生は、どなられたのです。

教室のうちがしんとしました。二人が、ぐずぐずしていると、先生は、まず小山の席へいらして、

「いま、やつていたものをお見せ。」と、お座から、引きずり出されました。

武田は、先生の権幕に抗しがたいと知ると、自分から席を出て、先生のいられる教壇の前へきて立ちました。先生は、

「武田、おまえは、さっきの唄をうたつて、小山は、ここでみんなに人形を踊らしてごらん。」と、おつしやいました。

小山は、さすがに耳の根まで赤くして、うつ向いていましたが、武田はしかられても、

頭をかきながら笑っていました。

このとき、敏ちゃんは、一人だけ、窓の外で、つばめが自由に、青い空を飛びまわっているのを、じつと見守って考えていたのであります。

「このつぎから、教室へこんなものを持って入ったら許さないぞ。」と、時間が終わったときに、先生は、小山におつしやいました。そして、それまでそこに立たされていた二人は、はじめて許されたのでした。

四

敏ちゃんの大きな磁石は、ラジオ屋のおじさんから、電気をかけてもらって、ばかに力が強くなりました。

学校の帰りに、往來の上で、義ちゃんや武ちゃんは、敏ちゃんをはさんで、敏ちゃんの大きな磁石に自分たちの小さな磁石を押しつけて、電力を分けてもらっていたのです。

「いいんだねえ、敏ちゃん、すこしばかり分けてもらっても、敏ちゃんのほうは、ずっと

強^{つよ}いんだものね。」と、武^{たけ}ちゃん^が、氣^きがねをしながらいいました。

「僕^{ぼく}も、ラジオ屋^やのおじさん^にお願^{ねが}いして強^{つよ}くしてもらおうかな。」と、義^{よつ}ちゃん^がいいました。

「いいよ、僕^{ぼく}のは、赤^{あか}いところがはげているのだから、どうせ使^{つか}わなくても、ひとりで電^{でん}氣^きがなくなるの^だもの。」と、敏^{とし}ちゃん^は、今^{こん}度^ど、お母^{かあ}さん^に、赤^{あか}いところのはつきりとした、新^{あた}ら^しい磁^じ石^{しゃく}を^か買^かつてもらうことを頭^{あたま}に描^{えが}いていました。そこへ、同^{おな}じ組^{くみ}の西^{にし}山^{やま}がきかかりました。

「君^{きみ}、それよりか、磁^{こう}石^{せき}を取りに^とい^いかない？ その^{ほう}が、よほどおもしろいぜ。磁^{じて}鉄^{てつ}鉱^{こう}も、黄^{おう}銅^{どう}鉱^{こう}も、金^{きん}もあるのだよ。」と、郊^{こう}外^{がい}の方^{ほう}から通^{つう}学^{がく}する西^{にし}山^{やま}が、い^いました。

「ほんとうかい、どこに？」と、義^{よつ}ちゃん^と、敏^{とし}ちゃん^は、磁^じ石^{しゃく}のことを忘^{わす}れたように、目^めを輝^{かがや}かしました。

「いま、河^{かわ}の工^{こう}事^じをして、割^わつた石^{せき}塊^{かい}がた^くさんあるのだ。さがせば、いろん^いな石^{いし}が見^みつかるよ。金^{きん}は、紫^{むらさ}色^{きいろ}をして^いるだ^{らう}。ち^ちか、ち^ちか光^{ひか}る黄^{おう}銅^{どう}鉱^{こう}と、それ^に、方^{ほう}解^{かい}石^{せき}が、い^いちばん多^{おほ}い。方^{ほう}解^{かい}石^{せき}は、た^たくさんあるよ。」

それだけでなくさえ、みんなは、なにか珍しい、愉快なことはないかと思つていた矢先ですから、それをきくと、飛び立つばかりにうれしかったのです。西山を往來に待たしておいて、かばんを家へ投げ込むと、すぐに、敏ちゃんも、武ちゃんも、義ちゃんも、駆け出してきました。その姿を見つけると、

「私たちも、つれていつてね。」

原つぱに遊んでいた、かつ子さんと、よし子さんが、みんなの後を追つてきました。彼らは、電車を横切つて、緑の樹がたくさん目に入る、静かな、せみの鳴き声のする、涼しい道を急いだのであります。

西山は、一同を野中の河普請場へ案内しました。工事はなかなかの大仕掛けでした。河水をふさいで、工夫たちは、河底をさらつていました。細いレールが、岸に添つて、長く、長くつづいていきます。その行方は光った草の葉の中に没していました。工事場の付近には、石の破片や、小砂利や、材木などが積んでありました。また、ほかの工夫たちは、重い鉄槌で、材木を川の中へ打ち込んでいます。太い縄で、鉄槌を引き上げて、打ち落とすたびに、トーン、トーンというめり込むような響きが、あたりの空気を震動して、遠くへ木霊していました。ときどき、思い出したように、ゴーツ、ゴーツと叫びを

上げて、トロツコが幾台となくつづいて、小石を満載してきました。これを工事場へ開けると、ふたたび、あちらへ引き返していくのでした。

「あつちに、まだ割った石がたくさん積んであるのだよ。」

西山は、先頭に立って、草原の方へ突進しました。なるほど、トロツコの通る

レールから、そう離れていないが、工事場からはかなり距たった草原の中に、石の破片が、白い小山のごとく積み重ねてありました。知らない子供が二、三人、先にいつて、熱心に一つ、一つ、石をより分けている姿が見えたのです。

「石を取つてもしかられない？」と、敏ちゃんが、ききました。

「この大きいのは、一つだつて重くて持つてはいかれないさ。ちつとばかり、欠く分なら、かまわないだろう。」と、西山が、答えました。

「しかられないかなあ。」と、義ちゃん、考えながら、トロツコの通るたびに、線路の方を見ました。

「怒つたら、逃げればいいや。」

西山は、そういつて、もう石の丘へ登っていました。

「ほら、これが方解石なんだぜ。」

白い石の破片に、他の色とまじって、ひとときわ白く光沢を放ち、塩などの結晶のように見えるのです。方解石だけは、割つても、割つても、四角形に割れる特徴を有していました。

「ちよつと、水晶みたいだね。」と、武ちゃんが、いいました。知らない子供たちまで、西山のそばに寄つてきました。その子供たちの手にも、なにか石が握られています。「これ金でない？」と、その一人が、自分の持つている、石の破片を示しました。

「どれ、そいつは磁鉄鉱らしいな。金は、もつとうす紫色を帯びているよ。」と、西山が、いいました。

「この、ちかちか光るところだけは、銅なんだろう？」と、義ちゃんが、のぞきました。

「そうらしい。」

「僕、方解石を見つけた！」

見ると、敏ちゃんは、石で、石を打って、その部分だけを取ろうとしています。

「君、方解石って、どんなの？」

知らない子供の一人が、よく知ろうとして、敏ちゃんにききました。

敏ちゃんが、教えていると、ちようど、ゴーツ、ゴーツと風を切つて、レールの上を走

つてくる、トロツコの音がしました。

「おい、がきども、いたずらするなあ。」と、そのトロツコは、通り過ぎるときに、わめてゆきました。

二人の労働者が、空のトロツコに乗っていました。元気のいい若者でした。後からも、後からも、いくつかのトロツコはつづいてゆきましたが、中には、こちらを見て、親しげに笑っていく男もありました。

「さつきの奴、生意気だね。」といったのは、武ちゃんです。

「もし、あいつが飛んできたなら、僕たち逃げようか。」

「逃げなくたっていいさ。」

「そうしたら、おもしろいな。なんで僕たち、捕まるもんか。」

「石を投げてやろうや。」

「かつちゃんや、よし子さんは、早くあっちへいっておいでよ。」と、義ちゃんが、いいました。

「私、つかまったら、あやまるわ。」と、よし子さんが、いいました。

「いやよ。だって、私たちなにもないんでしょう、見ているだけですもの。」と、かつ

子さんが、いいました。

「それだから、女なんか、こなればいいんだ。」と、武ちゃんが、怒りました。

「もう、いいよ。」

「それよりか、早く、いいのを見つけてようや。」

敏ちゃんは、真つ赤な顔をして、石を石に打ちつけていました。

しばらく、みんなが、石を割るのに夢中だったのです。

五

突然「ブーウ。」と、長いうなり声をたて、トラックが、原っぱの中へ入ってきました。石の破片を運んできたのです。

「きたっ！」といつて、みんなは、逃げ出すような身構えをしたけれど、もう逃げ出すきがなかった。はや、トラックは、目の前にきて止まりました。止まるといつしよに、ぱつと三人の男が、自動車の上から飛び降りました。そのうち、一人の男が、敏ちゃんのそばへいつて、手もとをのぞき込んで、

「どんな石を探しているんだね。」と、ききました。そのやさしみのある質問に、みんなは、ちよつと意外な感じがしました。

「方解石を取つていたのだ。」

敏ちゃん、正直に答えたのです。

「学校の理科で、習つているんだな。」と、その男は日に焼けた黒い顔に、白い歯を見せて笑つていました。

「おじさん、この石はどこからくるの？」と、敏ちゃんが、ききました。

「埼玉や、茨城の方からくるんだ。大きな石を機械にかけて、こんなに細かにして、電車道や、河川工事に使うのさ。」と、その男は、答えました。

これをきくと、敏ちゃんは、なんとなく石の故郷がなつかしい気がして、思わず、大空の果てをながめたのです。先のとがった森影が、まぶしい日の光に霞んでいて、遠くの地平線には、白い雲が頭をもたげていました。

三人のおじさんたちは、石をそこへ下ろすと、またトラックを運転して、原っぱの中をどこへとなく消えてしまったのです。

「あのおじさんたちは、いい人たちだな。」

「この石は、遠いところからきたのだよ。」

「トンネルを掘るときは、ダイナマイトで、岩を砕くのだってね。」

「ああ、ド、ドーン！　すごいだろうな。」

「いまのおじさんは、ラジオのおじさんに似ているだろう。」

「ちがうわ。」

「似ていたよ。」

「そう思うのは、敏ちゃんだけよ。」

石山の周囲で、こんなことをいつていけると、また、ゴーツ、ゴーツと、トロツコが、風を切つて走つてくる音がしました。ここからは、草の間に見えつ、隠れつしている細いレールは、頼りなげな二本の火ばしのようにしか見えなかったのです。

小砂利をいっぱい積んだ箱の上に、先刻のどなった、元気な若者が突つ立っていました。敏ちゃんは、握つていた石を手から放して、その方を振り向いていると、男は、なにかいいたげなようすをして、こちらをにらんでいたが、ちょうどカーブへさしかかった途端に、調子づいているトロツコは、はつと若者が気づいたときには、もう脱線して、止まってしまったのでした。だが、それを知らずに、後から、後から、ほかのトロツコは、

唄^{うた}など歌^{うた}いながら、走^{はし}つてくるのです。

あわてて、若^{わかもの}者は両^{りょう}手^てを高^{たか}く上^あげて叫^{さけ}びました。

「だっせんだぞう。」

すると、いくつかのトロツコは、ぴたりと止^とまってしまいました。

「あいつ、生^{なま}意^{まい}だから罰^{ばち}が当^あたつたんだね。」と、義^{よつ}ちゃん^が、いいました。

若^{わかもの}者は、まったく子^こ供^{ども}たちの方^{ほう}に氣^きを取^とられて、自^じ身^{しん}の注^{ちゅう}意^いを怠^{おこ}つたためでした。

そこで、いっしょうけんめいになつて、脱^{だつ}線^{せん}した車^{くるま}を直^{なお}そうとしたけれど、とうてい二^ふ

人^{たり}の力^{ちから}ではだめでありました。しかし、仲^{なか}間^まはそれと悟^{さと}ると、すぐ^{くるま}に車^とから飛^おび降^おりて、

トロツコの脱^{だつ}線^{せん}した場^ば所^{しょ}へ集^{あつ}まってきました。そして、力^{ちから}を協^{あわ}せて、やっ^{おも}と重^{くるま}い車^もを

との位^い置^ちにもどすことができたのです。

トロツコは、ふたたび、レールの上^{うへ}を快^{こころ}く走^よりはじめました。

「万^{ばん}歳^{ざい}！」と、武^{たけ}ちやんと、敏^{とし}ちやんは、手^てをで^あきるだけ上^さげて、叫^{さけ}びました。おそら

く、二^ふ人^{たり}の若^{わかもの}者は、その声^{こえ}を聞^きいたであらうけれど、自^じ分^{ぶん}の意^い地^じ悪^{わる}さを心^{こころ}に恥^はじたのか、

こち^みらを見^みず^みにいつてしまいました。

「もう、帰^{かえ}ろうよ。」

「今度は、あのいいおじさんだつて、きつとしかるから。」

帰りかけると、知らない子供たちも、敏ちゃんや、かつ子さんや、義ちゃんたちといつしよになつて、原っぱを去りました。めいめいが石の破片を抱いて往来へ出た時分、幾分日が蔭つて、どこからともなく涼しい風が吹いてきました。白い雲が、いつのまにか、自分たちの頭の上まで広がっていたのです。

途中で、西山や、知らない子供たちと別れました。

「家へ帰ったら、みんなで、石を分けようね。」と、敏ちゃんが、いうと、
「僕は、こんど理科の時間に、学校へ持つて行って先生に見せるのだ。」と、義ちゃん
が、いいました。

みんなは、楽しかった、一日の遊びを思い返しました。黄金色の夏の日は、まだ、暗くなつて遊ぶなくなるまでに、だいぶ時間があつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日

1983（昭和58）年1月19日第5刷

底本の親本：「未明童話 お話の木」竹村書房

1938（昭和13）年4月

初出：「お話の木」

1937（昭和12）年7月

※表題は底本では、「白《しろ》い雲《くも》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年12月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白い雲

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>